

越来グスクと領主たちの伝説

『中山世譜』には、尚泰久が越来の領主であったときに「世理休」という名前の側室を置いたと書かれています。

越来集落の言い伝えでは、越来グスクに住んでいた頃の尚泰久に見初められた宮里集落の娘に子ができ、越来の川畑家でその子を生み育てたといえます。川畑家には出産のお祝いとして白椿とみかんの木が贈られ、戦前まで残っていました。みかんは戦災で失われ、白椿も 1997 年に枯れてしまいました。しかし挿し木で殖やしていた白椿を植え戻すことができ、今も時期になると川畑家の白椿は花を咲かせています。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

宮里の石城家には戦前、鬼大城が着たという着物や、指を鍛えるため石投げ遊びに使っていた石があったそうです。ある年の八月十五夜、鬼大城が石城家を訪れると、村の青年たちが棒術の稽古をしていました。鬼大城はいたずら心を起こし、彼らから六尺棒を借りると地面深く押し込んでそのまま越来グスクに引き揚げてしまいました。ところが城で奥さんに叱られた鬼大城は、すぐ宮里に戻ってきて青年たちに詫び、二、三名がかりでも抜けなかった棒を指でつまみ、すっと引き抜いて返してくれたそうです。



川畑家の白椿

越来グスク年表

2019年 国名勝「アマミクヌムイ」追加指定

1980年 城前公園整備、越来グスクの拝所改築

1955年 越来グスクの拝所再建

1945年 沖縄戦。越来グスク破壊



1700 年代～ 「越来城殿」として拝まれている

1613年 『おもろさうし』第二「中城、越来のおもろ」成立

1526年頃 各地のグスクから按司引き揚げ

1470年 尚宣威が越来王子に
1458年頃 鬼大城が越来間切の領主に

1435年 尚泰久が越来王子に

1100 年代～ 1400 年代
越来グスクがさかんに使われた時期

……神話の時代……

アマミクが越来グスクをつくった……？

国の名勝アマミクヌムイ

琉球国が 1613 年に編纂した『おもろさうし』第二の巻には越来グスクを讃えた歌がいくつかありますが、そのひとつに、琉球の島々を作った神の名前が登場します。

一 ごゑく こてるわに

ゑのち ともおそいや

あまみきよが たくだるぐすく

又 みもの こてるわに

おおまかな意味は「越来グスクの聖域に力ある神女が（祭祀を執り行なう）、アマミキヨが作ったグスクで」というもの。

アマミキヨはアマミクともいい、世の始まりに天から降り立ち、沖縄島のあちこちに聖地を造ったと伝えられています。

「アマミクヌムイ」は、この神話にもとづき、琉球国がまとめた四つの本『おもろさうし』『中山世鑑』『琉球国由来記』『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』でアマミクが関わったと記される聖地を沖縄県が候補に選び、国が名勝として指定したものです。なお、「ムイ」は岩山など高く盛り上がった場所を指す琉球語です。琉球の島々ではこうしたムイはよく見られる地形であり、ムイが聖地とされることもよく見られます。「アマミクヌムイ（アマミクのムイ）」はこのような琉球独自の自然と信仰のありかたを沖縄のことばであらわした名勝名として名づけられたものです。

名勝とは

国指定の名勝とは、独自の自然や風土が残る場所、神話や伝説の舞台、物語や歌に描かれて人びとに親しまれた場所など、その土地らしさ、日本らしさを伝える風景がある場所を、国が保護すべき文化財として選んだものです。

名勝は、その景色を眺める人が、自然や歴史、伝説や物語、信仰や記憶といったさまざまな情報を重ねたときに、その土地にしかない大切な風景として見出すものです。地域に暮らす人びとにとっては、原風景として心に抱く風景とも言えます。

現在の越来グスクは、グスクとしてのすがたを見ることはむずかしくなっていますが、ここが大きなグスクであった史実や、さまざまな言い伝えや、今も祭祀が続けられる信仰心のなかに、心の風景としての越来グスクが残っているといえます。



旧暦8月15日に行なわれるウスデーク



越来グスクの拝所での祈願

沖縄市立郷土博物館

2020年3月発行

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地2-19-6 文化センター3階
電話 098-932-6882



博物館Website

越来グスクと
周辺文化財マップ



一 ごゑく こてるわに
ゑのち ともおそいや
あまみきよが たくだるぐすく
又 みもの こてるわに

2019 年、越来グスクは国の名勝「アマミクヌムイ」に追加指定されました。

古歌謡集『おもろさうし』に、「あまみきよが たくだるぐすく」、すなわち琉球創生の神アマミクが作ったグスクだと越来グスクを讃える歌があることから、アマミクにゆかりのある琉球独自の聖地の一つとして指定されたものです。

越来グスクは沖縄戦の直後に丘陵ごと切り崩され、その後に都市開発も進んだこともあって、現在は住宅地や公園となっています。そのため、現在は高くそびえるグスクの威容を見ることはできません。

しかし、地元越来の人々の手で再建された越来グスクの拝所では、今も折々に欠かさず祈りが捧げられています。越来グスクとその周辺の街並みを歩いてみれば、今も、グスクがそびえていた頃の伝説や風景をたどることができます。

このマップでは、越来グスクを中心に越来グスクや越来地域の歴史を感じられる場所をご紹介します。

越来グスクはこんな場所

越来グスクは沖縄島中部、沖縄市城前町にあるグスクです。標高 70 ～ 80 メートルほどの丘に築かれ、南に比謝川の流れを見下ろすこのグスクは、戦前は石垣や拝所が残っており、頂上からは泡瀬の海を望むことができたといえます。しかし 1945 年に土台の丘ごと切り崩され、どんな作りのグスクだったか詳しいことはほとんどわかっていません。

越来グスクに関する最古の記録としては「琉球国之図」（1453 年作成）に「五欲城」と記されているものがあります。または第一尚氏第六代の王、尚泰久が作らせた「安国寺銅鐘」（1457 年記録）の銘に「魏古城に寄進した」ことが記されていたと記録があり、越来グスクを指すと考えられています。

尚泰久は王子時代に越来を領地としていました。のちには武勇に優れた武将、鬼大城ごと大城賢雄も越来を領地に与えられています。また、第二尚氏第二代の王、尚宣威も王子時代に越来を領地としていました。彼らは越来グスクを居城としていたと考えられています。

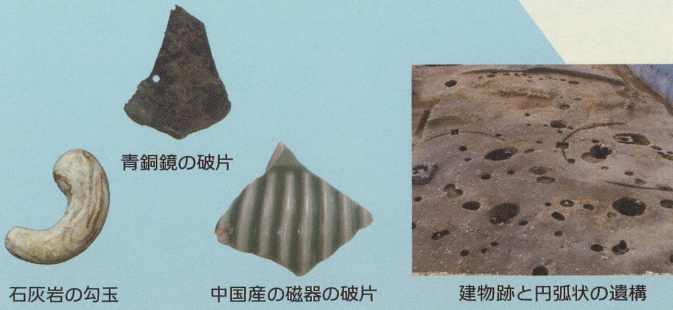
近世の越来グスクは、『琉球国由来記』の記述などからすると拝所がおかれ、越来集落や周辺の集落によって祭祀が続けられていたようです。現在も、越来共有会によって旧暦 1 月のタチウガンや 8 月の十五夜ウガン、12 月のウガンブトゥチといった祈願行事が行なわれています。

発掘！越来グスク

越来グスクでは、1985 年、2010 年、2011 年の 3 回、発掘調査が行なわれています。

1985 年の調査では、掘立柱建物跡や、柱穴などが見つかったほか、刀の鏢や鎧の金具、刀子などが出土しています。

2010 年と 2011 年の発掘調査では、炉跡や 4 本柱の建物の跡、円弧状の遺構が見つかりました。埋葬されたと思われる幼児人骨 7 体、成人人骨 3 体も見つかっています。遺物としては、中国産の陶磁器や、鉄製品、青銅鏡片や、穴があけられていない石灰岩製の勾玉、ガラス製の玉などが出土しています。青銅鏡片は 8 点あり、分析の結果、日本の平安時代に作成されたものや、中国の唐の時代の作と思われるものが確認されました。鏡は作られてからそれほど経っていない時期に琉球に持ち込まれたと推測されています。遠い地で作られた鏡がいつ、どのようにして越来グスクまで持ち込まれたのか、想像をかきたてられる出土品です。



石灰岩の勾玉

中国産の磁器の破片

建物跡と円弧状の遺構

しょう せん い

尚宣威王の墓

尚宣威は、第二尚氏初代王、尚円しょうえんの弟です。1470年に越来王子となり、越来グスクに居城したと考えられています。尚円の死後、第二代王となりましたが、王としての神託を受けることができず、半年で退位し、尚円の子である尚真しょうしんに位を譲りました。その後、越来に移り住んでまもなく死去したといわれています。越来集落の北西、比謝川沿いの崖にある墓が尚宣威の墓だと伝えられています。

殿内跡

尚宣威は越来で亡くなったと伝えられますが、長子の朝理は越来王子となり、娘は尚真王の妃となりました。朝理の子孫はのちに湧川殿内と名乗ります。湧川家につらなる一門が拝む「殿内跡」と呼ばれる拝所が今も越来に残されています。越来集落では、この一帯をトウンチヌスバ（殿内のそば）と呼んでいました。



尚宣威王の墓



殿内跡

西森公園の拝所

越来小学校から西に向かったところにある西森公園は、ニシムイと呼ばれる丘でした。『琉球国由来記』に越来村（越来集落）の拝所として名前が記されている四つの御嶽のうち、「西森」はニシムイに置かれていたと考えられます。現在は、「西森之御嶽」のほかに、越来中学校を建設するときに削られたウガンヤマに置かれていた3つの拝所がニシムイに移動されています。

ウガンヤマがあった場所

かつてのウガンヤマはうっそうと木が茂り、木や石を取ると祟りがあると恐れられていました。

『琉球国由来記』に越来集落の拝所として名前が記されている四つの御嶽のうち、「南風之嶽」「西之嶽」「大嶽」はウガンヤマにあったと伝わりますが、越来中学校の建設によって削られる以前の3つの拝所の様子は詳しくは伝わっていません。



西森公園の拝所



ウガンヤマにあった拝所が合祀されている



川畑家の白椿

尚泰久ゆかりの白椿がある家です。川畑家は越来の旧家の一つで、川畑家で育った尚泰久の子を見送るときに踊ったことから越来のウスデークが始まったという言い伝えもあり、現在でも八月十五夜のウスデークは川畑家の庭で踊ります。なお、白椿は「沖縄こどもの国」内の「ふるさと園」にも移植されていて、そちらでも見ることができます。

イシガー

川畑家の前にある井戸です。昭和3年に、水汲み用のポンプがついた汲み口が二つ設けられたので、ターチューガー（二つ井戸）とも呼ばれています。越来の人々は、元旦の若水や、赤ちゃんが生まれたときの産湯の水をこの井戸から取りました。なお、地図中のマークは井戸をあらわしています。今は井戸から水を汲むことはなくなりましたが、現在でも年中行事や健康祈願などで拝まれています。



川畑家の白椿



イシガー

ヌンドウンチャーの拝所

現在でも、越来集落の伝統的な年中行事の際に拝まれている拝所です。ヌンドウンチとは、普通、ムラの祭祀を司る最高位の神女を出す家のことを指す言葉です。しかし、越来のヌンドウンチャーには戦前から家屋敷はなく、拝所だけがあつたそうです。越来のウスデークは川畑家の次はヌンドウンチャーに来て踊りを終えます。

越来グスクの拝所

『琉球国由来記』に「越来城殿」と記されている拝所だと考えられています。戦前の様子については詳しいことはわかっていませんが、越来グスク内に3か所の拝所があつたという聞き取り調査の資料があります（『山城善三原稿・中頭調査（五分冊の三）』）。1945年に越来グスクが切り崩されたときに拝所も失われましたが、1955年に再建され、その後、改築を経て現在の拝所となっています。



ヌンドウンチャー



越来グスクの拝所